

News Letter

自治医科大学地域医療オープンラボ

Vol.53, Jan, 2012

患者さんから教わった実践消化器病学 ～地域でのPPIによる上部消化管出血予防の意義～

県立広島病院総合診療科 宮本 真樹 (広島県 10期)

自治医科大学を卒業し、早いものでもうすぐ四半世紀を迎えます。地域での臨床研究のお話をさせていただきます。深刻な医師不足の中、平成 21 年から地域で唯一の中山間の中小病院に赴任することになりました。ご指導いただいている春間賢教授 (川崎医科大学内科学食道・胃腸科) のもと、少しずつ成果もあがり DDW2009 (米国消化器病週間学会) で4演題の採択が決まっていた時期であり、研究がストップしてしまうのではないかと悲しい気持ちになりました。赴任後、PPI (プロトンポンプ阻害剤) による NSAIDs 潰瘍予防を病院全体で積極的に行っていることを知りました。

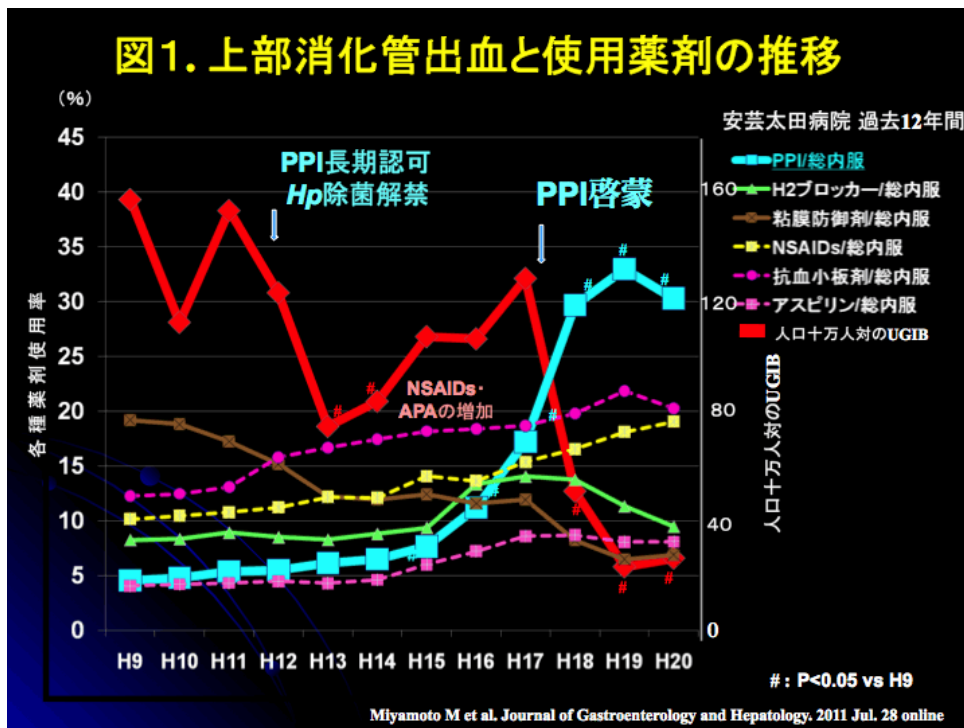


まわりの先生や看護師さんに聞き、「そういえば、最近、内視鏡止血や緊急手術をする患者さんはいないね。」との情報を得ることができました。事務室に行って上部消化管出血に対する止血例や手術例のリストアップができるかを聞いてみました。残念ながら、把握できないとのことでした。医局のとなりにある薄暗いカルテ庫をさがして、過去の内視鏡ファイルをみつけることができました。せっかくの機会なので、それだけを調べるのではもったいないと考え、消化性潰瘍、逆流性食道炎、胃癌も調査することにしました。所見用紙を1枚ずつチェックし、逆流性食道炎を赤色、消化性潰瘍 (胃潰瘍・十二指腸潰瘍) を黄色、胃癌を緑色のカラー付箋での貼り付け作業を開始しました。外来、病棟、当直業務の合間を縫って約4か月かけて12年分の調査を行いました。当初、黄色の付箋の付箋が早くなくなりましたが、近年は赤色の付箋のなくなるスピードが早まりました。つまり以前は、消化性潰瘍で苦しむ人が多かったのに、近年は逆流性食道炎の患者さんが急激に増えていることが、手に取るようにわかりました。「バイアスのかかりにくい閉鎖医療圏でのデータは、高齢化の進む我が国の消化器診療の将来像を予測するものである」と、春間教授に言っただけでした。その後、上部消化管出血 253 例について、詳細にカルテで検討することにしました。全科カルテであったため、各科で投与された薬がすべて把握可能でした。事務の方をお願いして、病院全体の処方率も調査いただきました。その結果、上部消化管出血の発見率が、PPI の処方率と有意な逆相関であることが判明しました (相関係数: -0.804 , $P<0.01$)。つらい農作業などで引き起こされる痛みの緩和のために用いられる NSAIDs や、虚血性心疾患や脳血管障害予防のために使用されるアスピリンを含む抗血小板剤が、生命を脅かす消化管出血などの合併症を引き起こしている現状を目の当たりにすることができました。DDW 2010 に演題応募し、採択されました。内視鏡における上部消化管出血の頻度の推移の成績として、英文誌に投稿しました。査読員からせっかくの閉鎖医療圏でのデータなので、地域での年間の発生率に修正するようにとコメントをいただきました。この地域での人口 10 万人あたりの年間の上部消化管出血発生率は、PPI の啓蒙普及により、160.8 から 23.6 へと有意に減少していました ($P<0.05$) (Journal of Gastroenterology and Hepatology. 2011 Jul. 28 online, 図 1)。地域の実状を観察し、予防もふまえて対応する地域医療の意義を学びました。一方、医療経済からみると、どの患者さんに優先的に効果の確実な PPI 治療を優先的に行うべきかを考えることも必要と思います。地域で学んだことをさらに発信できればと考えています。

この4月に、菅野健太郎教授が第98回日本消化器病学会を主催されます。シンポジウムのテーマの一つに、

「地域から発信する消化器診療」を取り上げられています。「地域での12年間の追跡調査でわかった逆流性食道炎435例の長期経過」の演題を応募しました。第15回GERD研究会で特別研究奨励賞をいただいた研究内容です。会長である本郷道夫教授（東北大学総合診療部）から「研究のフィールドを持っている先生方に今後もっとアピールして欲しい」との励ましのお言葉を頂戴しました。研究のメッカである大学病院に一度も属することなく、研究から最も遠い立場にいて考えていた自分でも、研究が続けられていることに喜びを感じています。2年間の勤務を終え、県立広島病院総合診療科に復帰しました。現在も毎週の外来支援、月に2回の当直支援は継続しています。その合間を縫って、さらに8年間さかのぼることができました。驚くことに、ここ20年間で、地域での消化性潰瘍は約1/5に減少、逆流性食道炎は約10倍に増加し、発見数は逆転していました。5月の日本消化器内視鏡学会総会のシンポジウム（地域医療における内視鏡の役割）に応募しました。バイアスがかかりにくく、細かな追跡調査のできる地域医療の現場は『臨床研究の宝庫』と確信しています。

私の経歴をみて、「大学にいたら、もっと研究できたでしょうにね。」と気の毒がって下さる先生も少なくありません。実際、私自身も内視鏡もない診療所に赴任する際には、研究から遠ざかってしまうだろうとくじけそうになったこともあります。しかし、不思議にも、最も臨床研究の成果があげられたのは、診療所や中小病院勤務の時代でした。『ピンチはチャンスの裏返し』という言葉の意味が理解できた気がします。素晴らしい指導者、スタッフ、そして何よりも多くのことを教えて下さった患者さん達に心から感謝したいと思います。恵まれない環境にいるとくじけそうになっている先生に少しでも勇気を感じていただけたならこの上ない喜びです。臨床研究、論文執筆の指導者がいないとお悩みの先生もきっとおられると思います。このオープン・ラボのスタッフは、親身に対応下さるものと信じています。



[発行] 自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープン・ラボ運営委員会
 事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
 TEL 0285-58-7477/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>